

ボルネオのプナン・ブナリの民族植物学：狩猟採集民の知る有用野生植物

小泉都（京都大学 アジア・アフリカ地域研究研究科）

森林を日常生活の場としてきた狩猟採集民はどのような有用野生植物を把握しているのだろうか。発表者はこれまでに、狩猟採集民のプナンが森林（原生林、二次林をともに含む）の植物を客観的に観察して詳細に分類していることを、植物の名称・分類の分析から示してきた。今回は、それらの植物にどんな利用性を認めているのか Christensen (2002) の調べたボルネオの農耕民の植物利用と比較しながら報告し、狩猟採集民から見た森林をさらに明らかにしたい。

調査地はボルネオのインドネシア・東カリマンタンにあるロング・ブラカ村。調査民族はプナン・ブナリで、サラワクのバラム川流域に暮らす西プナンと親類関係にある。プナン・ブナリは、1960年代頃から定住化して焼畑稲作を行うようになっている。ただし、狩猟採集活動を日常的に行っている村人は狩猟採集民としての知識を保持していると考えられる（これに関するデータと議論はここでは割愛する）。彼らからの聞き取り調査の結果を分析した。

プナンが有用とした野生植物は全体で 540 種（1種が複数の目的に使用されても 1種として数える）あった。プナンは各種道具に利用する材木種（160種）、樹皮を利用できる種（41種）などを、農耕民に比べかなり多く知っている。農耕民と比べ多いわけではないが、可食果物（153種）や良い薪炭材（72種）も数多く知っている。逆に、絶対値においても農耕民との比較においてもプナンが利用する種数が少ないのは、緑葉を食用とする種子植物（1種）、調味料植物（2種）、儀礼呪術植物（6種）などである。また、プナンは 56 種の薬用植物を知っているが、これも農耕民に比較するとずいぶん少ない。

ここから読み取れることは、プナンは比較的単純な植物の形質（果実が甘い、材が堅い、樹皮がはぎやすいなど）に依存し、かつ実用的な目的の用途に利用できる植物を多く知っているということである。一方、余剰的に発達した植物文化といえそうな調味料や儀礼呪術への植物利用は少ない。これらの植物利用の特徴は、プナンが広範囲の植物を比較的客観的に分類・命名していることとよく対応しているように思われる。ただし、全般的な知識が客観的で単純なものであっても、種間の質の差・分布の差などについて詳細に把握していることや、生業活動に関連する部分ではプナンの植物利用が高度な技術に支えられていることを付け加えておきたい（サゴデンプン採集やロタン加工など）。

引用文献：Christensen, Hanne. 2002. Ethnobotany of the Iban & the Kelabit.